

研究演習クラスにおける学生の変容

—日本人学生と中国人留学生の異文化接触を中心に—

Changes of Students in the Research Seminar Class

— Focusing on Intercultural Contacts between Japanese and Chinese Students—

福岡 寿美子*

Sumiko Fukuoka

アブストラクト：

研究演習のクラスにおける日本人学生と中国人留学生の異文化接触にともなう変容について、参与観察及びインタビューを中心としたフィールドワークに基づくフィールドノーツ、インタビュー資料、記述資料等を分析及び考察することによって、変容の具体的内容及び段階や過程を、質的研究法のエスノグラフィーによって明らかにした。

キーワード：

異文化接触、変容、フィールドワーク、参与観察、エスノグラフィー

I. はじめに

山田¹⁾(1996)は、留学生の日本社会での日常生活、勉学に必要な能力について、「異文化接触」という視点でとらえることが重要であるとしている。留学生が自分たちの文化とは違った日本文化に戸惑うことは、日本社会・日本人も留学生のもっている異文化に戸惑うことであり、留学生も日本人も互いに相手から異文化を感じてショックを受けているという。しかし、互いにショックを感じることは、疎むべきことではなく、歓迎されるべきことであり、留学生が留学して来るのも、日本社会がそれを受け入れることも、互いにショックを克服して、自文化の中だけでは期待しにくい世界の認識のしかたに気づく機会を得たことであり、価値のあることと考えている。留学生が日本社会に適応するだけでなく、日本社会も留学生の文化に適応してこそ、留学生が日本に留学し、日本社会が留学生を迎え入れる意味があると言っている。適応は一方が一方に迎合、同化することではなく、双方の努力によってなし得ることで、そうすることによって双方に利益をもたらすことになると考えている。

*流通科学大学情報学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2007年10月31日受理)

また、山田²⁾ (2001) は、日本語教育には人々が異文化間コミュニケーションを通して多くのことを学ぶための学び方を学ぶという役割があると考えている。今日的な課題になっている、地域社会から地球社会にいたるそれぞれの社会で多文化共生を目指すことや、地球規模での社会環境・自然環境の問題を克服することは、多様な文化的視点（多様な世界観）の連携・協力によってこそ可能になると考えている。これまでの日本語教育は、外国語としての、あるいは第二言語としての日本語の運用能力を養成する教育という役割が強調されてきた。しかし、これからは、今日の教育に求められている文化の相違から学び、自己の世界観の変容をも目指す地球市民教育（global education）の一つであることが期待されていると考えている。

福岡³⁾ (2003) では、第二言語教育における質的研究について、そして、福岡⁴⁾ (2004) では、日本語教育における質的研究の可能性について、エスノグラフィーを中心に論じた。

これらの先行研究を踏まえ、本稿では、U 大学の研究演習の S クラスにおける日本人学生と中国人留学生（以下、留学生という）の異文化接触にともなう変容について、参与観察、インタビュー等のフィールドワークをもとに、質的研究法であるエスノグラフィーによって、明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 質的研究

まず、研究方法の質的研究について概観する。N・K・デンジン／Y・S・リンカン編^{5) 6) 7)} (2006a,b,c) によると、質的研究は「1970 年代初頭に学問界で始まった改革運動」の呼び名であり、今や研究分野の 1 つとして確立し、学術誌や学会や研究ポストを持つに至っている。主に北米及びヨーロッパで展開したこの運動は、フェミニズム的でポスト構造主義的でポストモダンな形をとり、社会科学の多くの分野、すなわち社会学、教育学、人類学、コミュニケーション研究、ソーシャルワーク、地域衛生学、障害者研究、質的医療研究等に目覚しい進出を遂げてきた。そして、様々な分野の解釈的研究者たちがエスノグラフィーの新しい書き方を探求している。1990 年代、日本の社会学、教育学、社会福祉学、人類学、心理学等において、第 2 次世界大戦以後日本で支配的であった実証主義的で量的な研究に対するある種の反発から質的研究への関心が高まった。新しい世代の日本の研究者たちは、世界各地の研究者と同様に、社会的現実を理解する新しい方法を求め、世界を変革し、積極的な社会変動の促進に役立ちたいと望んでいるという。日本の研究者たちは、エスノメソドロジー、グラウンデッド・セオリー、社会構築主義、ポストモダン人類学、批判的人类学、分析的エスノグラフィー、言説分析、カルチュラル・スタディーズ等の新しいアプローチにも関心を寄せてきた。特に、若い世代の研究者たちは、これらのアプローチに基づいた経験的研究の成果を生み出し始めているという。

そして、日本では 2004 年、若手の研究者たちによって、心理学及び人間科学・社会科学・自

然科学等の関連諸分野における質的研究を促進することを主な目的として、日本質的心理学会 (Japanese Association of Qualitative Psychology) が設立された。

N・K・デンジン／Y・S・リンカン編⁵⁾ (2006a) によると、質的という用語は、数、量、強度、頻度などによって実験的に検証や測定はできないモノの質や過程あるいは意味を重視している。これに対して、量的研究は過程ではなく変数間の因果関係の測定と分析に重点をおく。質的研究者はリアリティの社会的構築性や研究者と対象者の密接な関係や探究を方向づける状況制約的条件を強調する。質的研究者は探究の価値付与性を重視し、社会経験がどのようにつくられ意味づけられるかに重点を置いた問いに答えようとするという。

2. エスノグラフィー

次に、質的研究のエスノグラフィー (ethnography) について述べる。N・K・デンジン／Y・S・リンカン編⁶⁾ (2006b) によると、テドロックは「エスノグラフィーは、特定の出会い、出来事、理解といったものを、より豊かで意義深い文脈の中に位置づけようとする継続的な試みにかかわるものである」と指摘している。エスノグラフィーでは、人間の社会生活を表象するために、調査設計、フィールドワーク、様々な探究の方法を緊密に結びつける必要があり、エスノグラフィーによって生み出された作品は、個人的な経験や自叙伝的要素を反映している。エスノグラフィーは、現代の質的研究において、熱い議論の対象となっている研究方法であり、伝統的な立場をとる研究者 (実証主義者) とポスト実証主義者は、エスノグラフィーの定義、この方法による研究結果の評価基準、データの解釈過程において再帰性を重視する研究者の立場をめぐる、議論を戦わせている。過去 10 年間のあいだに、エスノグラフィーをどのように計画し実践するか、それを通してどういう表象を作り出し、それをどう解釈するかということについての理解は大きく変化した。そうした変化の過程において、経験の語りを重視するエスノグラフィーの場合は、現代社会における諸言説に何よりも注意を払うべきだという立場を主張するに至っている。エスノグラフィーによって生み出されるテキストは、研究される世界に対する研究者のかかわり方に大きく左右されるということを多くの人が理解している。そうしたテキストは、読者に真に迫っているという感覚をもたせられるかどうかという観点からこそ、よりよく評価できるのであるという。

そして、カール・A. グラント／グロリア・ラドソン・ビリング編⁸⁾ (2002) によると、エスノグラフィーという用語は、豊かな記述を目的とした質的な研究プロジェクトならどんなものにも緩やかに適用されるという。エスノグラフィーの学問的な母体とされる人類学に根ざしたより厳密な定義では、文化の解釈をめざした質的な研究のプロセス及び成果であるとしている。エスノグラフィーは、出来事や経験の詳細を報告するに止まらず、我々がそのなかで生きているところの意味の網の目が、これらのなかでどのように表象されているのかを説明しようとする。

エスノグラファーは、多くの場合には内側からの視点と記されるエピック（叙事詩的）な視点からの記述を通して文化に関する理解を生み出す。このような理解は、3つのデータ源を詳細に探究することによって深まっていく。まず、フィールド場面での長期にわたる関わりは、参与観察といわれる。この用語はエスノグラファーのもつ二重の役割を表している。ある場面で生活を営むとはどういうことかを理解していくために、研究者は観察者としての立場を保持しながら、つまり経験を記述しながら、その場面の生活の参加者にならねばならない。2つ目の情報源はインタビューで、それは文化に関する知識を明らかにするために、特定されているが開かれた質問をすることによって、目的とするデータ収集の機会を提供するものである。最後に研究者は、関心のあるトピックの特徴を体現しているような代表的な人工物を収集する。これらのデータ源を基にして、エスノグラファーは、文化の分析枠組みを用いて、集団によって共有される暗黙の意味を推量するのである。

文化人類学の分野で発展してきたエスノグラフィーは、当初はエスノグラファーの故国から遠く離れた植民地の人々の生活パターンを記述するのに用いられた。しかし、1920年代になってエスノグラフィーは、社会学におけるシカゴ学派によって故国に近づけられた。野外生活者、街角の人々、アルコール依存者などの都市における諸集団の探究を中心に扱った研究がなされた。このような初期の研究の鍵は文化の比較であり、白人でミドル・クラスの男性であった調査者とは異なる諸集団が研究対象とされた。エスノグラファーは、1970年代に教育に目を向け始め、教育人類学の分野が形成された。教育における文化の不連続性、人種やエスニック集団の学業達成におけるばらつきと学校教育がかれらにとってもつ文化的な意味、そして権力構造に対する抵抗を見る上での新たな見方に光を当てるのに、エスノグラフィーを用いた研究は役立ったのである。

今日では、エスノグラフィーのアプローチは広がって、文化集団に対する記述的説明から、支配や抵抗の潜在的可能性の研究を通して、エンパワーをめざす運動志向型の批判的エスノグラフィーにまで及んでいる。伝統的な人類学の文化概念に、フェミニズムやマルクス主義理論などの理論的枠組みを取り入れることによって、エスノグラフィーで扱われる領域は広がり、新たな問いや方法論に関する関心を生み出している。文化的実践に対するエスノグラフィックな検証は、多様な背景をもつ生徒とかれらが学ぶ学校のニーズの隔たりを埋める作業を熟考する上で、豊かな情報源となる可能性があるという。

3. フィールドワーク

本節では、フィールドワーク (fieldwork) について述べる。金本⁹⁾ (2005) によると、文化の異質性、普遍性、またはその変容のプロセスを定性的に分析する方法としてのフィールドワークは、調査者と被調査者とのコミュニケーションによる共同作業であるという。フィールドワークは、調査・研究の技法の1つであり、研究者自らがフィールドに出かけていき、現地における生

の異文化体験をもとに第一次資料 (primary data) を収集する作業が含まれることが特徴であるという。フィールドワークは、参与観察等の手法を通して経験的、質的、或いは定性的なデータの収集を手堅く行うことから始めるという。仮説を検証することがその務めではなく、日々変化する文化や社会現象を解釈・記述することにより、特殊から普遍へと理論の生成を目指す経験一帰納的 (inductive) アプローチであるという。限られた範囲の対象について、狭く深く調べたいときは、質的調査法がよいという。

フィールドワークは、原則として、まず自分が属している集団・社会・文化から離れ、異質な文化を担った異人 (stranger) として、調査の対象となるフィールドへ移動することから始まる。そこに長期間滞在して現地の生活に溶け込み、現地の人々との濃密なコミュニケーションを通して、そこで営まれている文化や社会に関する情報を収集するという参与観察を行う。現地の人々と経験を共有し、現地の人々が有する視点 (natives' point of view or emic perspective) から、文化の解釈 (interpretation of culture) ・再解釈を繰り返し、異文化を描くことを目指すという。この調査の手法から得られる情報・資料は、フィールドに入り込んだフィールドワーカーの経験 (experiences) に基づく質的 (qualitative) なものなのであるという。フィールドワークは調査者の気力・体力・人格など全人的にすべてが要求される、とてつもなく非効率で無駄と苦勞の多い調査方法ではあるが、研究対象とする人々と直接触れ合う機会を提供してくれ、ありのままの人間の姿を観察し、生きた人間の声を聞くことを可能にしてくれるという。

a. 参与観察

まず、参与観察 (participant observation) について述べる。金本⁹⁾ (2005) によると、研究対象とするフィールドに入り込み、現地の人々との濃密な人間関係を構築しながら、直接的なコミュニケーションを通してデータを収集する活動全般を参与観察という。現地でしか入手できない記録された資料、例えば、文献、アーカイブ、統計、新聞・雑誌記事、議事録、日記、手紙、自伝、写真やビデオなどの映像資料等を収集する作業も含まれるという。

参与観察は一見簡単そうに見える行為であるが、参与と観察を同時に行うことは意外に難しい。現地の人々に限りなく接近しながら、観察するための距離は保たなければならないというジレンマに始終悩まされるという。信頼関係を強調しすぎてインフォーマントと完全に同一化してしまえば、研究者としての自己は消滅してしまうし、客観的な研究者としてのアイデンティティに固執すれば、インフォーマントとの距離は縮まらないという。フィールドワークを成功させるためには、参与と観察のどちらにも偏らないスタンスのあり方をつねに意識しておくことが必要となってくる。外部からの視点 (エティック ; etic) と内部からの視点 (イーミック ; emic) の間に揺れる自己を観察することも参与観察のなかに含まれるという。

b. インタビュー

次に、インタビュー (interview) について述べる。金本⁹⁾ (2005) によると、面接による情

報を収集する方法をインタビューという。インタビューには、フォーマルなインタビュー (formal interview) とインフォーマルなインタビュー (informal interview) がある。研究の状況や目的によって、インタビューの方法は使い分けられるが、日常のコンテクストを重視するフィールドワークにおいては、インフォーマルなインタビューが多用されるというので、本研究においても、インフォーマルなインタビューを行うこととする。フォーマルなインタビューは、予め確定されている質問のリストに従って尋ねるインタビューの方法であり、構造化されたインタビュー (structured interview) とも言われる。フィールドワーカーとインフォーマントは、インタビューを行う目的で出会い、それぞれのフォーマルな役割 (調査者と被調査者) が了解された状況のなかで、決められた質問を決められた順番に尋ねていくという。これに対して、インフォーマルなインタビューは、インタビューする相手やその場の状況に応じて質問や順番を変え、インフォーマントの経験、意見、感情をできるだけ自然に引き出して答えの中に表現させようとする方法であり、構造化されていないインタビュー (unstructured interview) とも言うところである。

Ⅲ. 本研究における調査方法

第Ⅱ章の研究方法を基に、本章では本研究の調査方法について述べる。本研究はU大学における研究演習のSクラスをフィールドとする。U大学では、第4セメスター (2年後期) から研究演習Ⅰ'が始まり、第5、6セメスター (3年通年) は研究演習Ⅱ'となる。Sクラスは2005年9月に研究演習Ⅰ'を履修した日本人学生7人 (男子のみ) と中国人留学生6人 (男子4人、女子2人) からなる。大半が2年生であるが、3年生が4人 (日本人男子学生2人、男子留学生2人) いる。彼らは2006年4月には、研究演習Ⅱ'へと進んだが、他のゼミから中国人女子留学生が1人移ってきたので、全部で14人となった。夏期休暇中に、中国人男子留学生が1人、大学を辞め帰国した。また、後期から中国人女子留学生が1人来なくなったので、全部で12人となった。このようにゼミのメンバーに多少の変化はあったが、これらを含めてSクラスとする。

フィールドワークはこのSクラスを中心に、2005年9月から2007年3月まで実施した。フィールドワークの主な場所はT演習室である。T演習室は約50㎡の広さの縦長の部屋で、入り口のスリット入りドアから、カードキーで入ると、前方に大きなガラス窓が2つある。入り口ドアの右手の壁面には、横長の大きなホワイトボードがかかっている。ドアの左手の壁面には、白い長机が3つ並べられ、その上に常時使用可能なパソコンが5台と左端にはプリンターが1台置いてある。パソコンに合わせて椅子が5つ並べてある。部屋の中央には白い長机が8つ口の字型に並べられており、各机には3つずつ椅子が並べられている。

このようなT演習室で、毎週90分、上述の演習生たちと教師である筆者によって、研究演習が繰り返された。その様子を参与観察及びインタビューによって描き出す。

佐藤¹⁰⁾ (2006) は、フィールドワーカーの役割のタイプとして、次の図1の4つを挙げてい

Y6 は、グループインタビューとする。

1. 研究演習 I' (第 4 セメスター) における変容

研究演習 I' の第 1 回目の授業では、日本人学生と留学生はもちろんのこと、日本人学生同士においても、まだまだ打ち解けていない様子が見られる。特に日本語のレベルのあまり高くない留学生 N が、不十分な日本語で話すと、日本人学生の N に対する視線が感じられた。

(aX1 ; 2005 年 9 月 22 日フィールドノーツより)

ゼミ生の親睦を深めるべく、10 月 27 日、夜コンパを行った。それ以後、ゼミ生同士が少し打ち解けた感じが見られた。

同じ授業を取っていたので、このゼミの留学生にノートを借りたんですが、字が読めなくて、何が書いてあるか分からなかったの、後で直ぐ返しました。～～(略)～～留学生が、これまでどんな人生を歩んで来たのか、また、どんな考えを持っているのか、どんなバックグラウンドの人かなど、もっと知りたいです…。もっと知れば、より理解が深まると思います。

(aY1 ; 2005 年 12 月 15 日 A へのインタビューより)

外国人は日本人と違うし、言葉が通じないから、これまで人というより、物という見方をしていました。～～(略)～～留学生のことがよく分からず、意思疎通できないから、ちょっと怖い感じがします…。他の授業でも留学生と話すことはほとんどありません。留学生は前の方に座ってますが、日本人は基本的に後ろの方の席ですから……。～～(略)～～言われたことが分からなくて、会話にならなかつたら気まずいので……。変な印象を与えるより話さない方がいいと思います…。～～(略)～～でも、留学生への免疫が、多少つき始めたかなあ……。

(aY2 ; 2005 年 12 月 15 日 B へのインタビューより)

留学生とは、席が隣だと、ちょっとしゃべるぐらいで、あんまりしゃべらないですね……。分け入った話はしないで……。まだ、そこまで仲がよくなってないです……。～～(略)～～留学生は、留学生同士でかたまっているように思います…。折角日本に来ているのだから、日本に溶け込んだ方がいいと思います……。～～(略)～～もうちょっと仲良くなりたいです……。

(aY3 ; 2005 年 12 月 15 日 D へのインタビューより)

留学生と、おはようとか、挨拶はするようになりました…。女の子はちょっと……。目が合ったらしますが……。～～(略)～～留学生は、普通に日本語しゃべれるのですごいと思います。～～(略)～～人に教えるの好きなので、分からないことがあったら、嫌々じゃなく、進んで教えてあげます……。

(aY4 ; 2005 年 12 月 15 日 E へのインタビューより)

留学生は静かなイメージだったんですけど、ディスカッションとかで、結構しゃべれることが分かりました……。ゼミ以外でも、しゃべってくれたりするんで……。留学生はちゃんとしゃべれないものと思っていたから、ちょっとでもしゃべれると上手いと思います……。～～(略)～～助詞とか一々直さなくても、コミュニケーションできるから敢えて直さないで

す…。(H)

留学生に対して、自分の中の壁がなくなったというか…、離れていたものが、～～一緒にやっていて～～、身近な存在になりました…。(G)

個人によって違うと思いますが、日本語の間違ったところ、その時直してくれる方が嬉しいです。～～(略)～～ゼミのみんなと一緒に遊びに行きたいです…。たまに、日曜日とか、みんなの好きなこと合わせて…、ビリヤードとかして・・・、遊びに行くと、相手のことがよく分かります…。(O) (aY5 ; 2006年1月12日 H、G、D、I、O へのインタビューより)

日本人は深く付き合っって欲しい…。挨拶だけではなく、心を見せて欲しいです…。日本人と食べに行ったり、カラオケに行ったりしたいです…。～～(略)～～みんな忙しい。バイトあるから…。～～(略)～～日本人の女の子のゼミ生が入って欲しいです…。男ばかり…、男子は話しかけにくいです…。(Q) (aY6 ; 2006年1月12日 Q、L へのインタビューより)

2005年9月に研究演習Ⅰ’が始まって、3、4か月が過ぎ、第4セメスターが終わろうとしている。この間の日本人学生と留学生における異文化接触について、上記のフィールドノーツ及びインタビューを基に分析及び考察を行う。aY4から明らかなように、この段階において日本人学生は留学生と挨拶を交わすが、aY2やaY3から分かるように、日本人学生が留学生と積極的に話をすることはない。しかし、aY1やaY3から、留学生のことをもっと知りたい、もうちょっと仲良くなりたいと望んでいることが分かる。また、aY1から、結果的には思わしくなかったが、日本人学生が留学生からノートを借りるということが行われているのが分かる。また、aY2からは、留学生への免疫が多少つき始めた、aY5Gからは、留学生に対して、自分の中の壁がなくなり、身近な存在になったとあり、僅かながら日本人学生の異文化接触による心境及び状況の変化、変容が窺える。

また、aY5Hには、留学生はゼミ以外でもしゃべってくるとあり、日本人の中でも、より留学生とコミュニケーションしやすい人としにくい人があることが分かる。また、aY3では、日本人は、留学生に対して、留学生は留学生同士でかたまっているのもっと日本、日本人に溶け込んだ方が良くと考えており、一方、aY5OやaY6Qでは、留学生は、ゼミの皆とビリヤードなどの遊びに行きたい、日本人と食べに行ったり、カラオケに行ったりしたいと思っており、お互い意思疎通ができていないことが明らかである。留学生は、日本人学生に対して、挨拶だけではなく、深く付き合っって、心を見せて欲しいと願っていることが分かる。また、aY4では、日本人男子学生は、留学生の女の子はちょっと・・・と言っており、aY6Qでは、女子留学生が、日本人の男子学生は話しかけにくいと言っているため、日本人学生、留学生いずれにしても、同性より異性は、よりコミュニケーションが取りにくいことが分かる。また、aY5Hでは、日本人学生は、留学生と話している時、助詞とか文法の間違いに気付いても、一々直さず、コミュニケーションできればいいと考えているのに対して、aY5Oでは、留学生は、日本人学生が、日本語の間

違ったところを、その時に直してくれる方が嬉しいと考えている。この点においても、日本人学生、留学生の間に、お互い考え方のずれがあることが示唆された。

2. 研究演習Ⅱ' 前期（第5セメスター）における変容

2、3月の春休みを経て、4月からは研究演習Ⅱ' になった。R (CF0→3) が新しくゼミのメンバーに加わった。教師である筆者は、T 演習室では、研究演習Ⅰ' の時から毎回大きなホワイトボードを背にして、ほぼ中央に座るが、ゼミ生たちもだいたい毎回同じ席に座る傾向が見られる。研究演習Ⅰ' のインタビューにおいて、A がもっと留学生のことを知りたいと言ったので、研究演習Ⅱ' では、前期の前半の数回を使って、お互いをより知るためにも、それぞれ自分史を書いて発表することとした。留学生の中には約1万字書いてきた者もあった。

E (JM2→3) と N (CM3→4) が、隣同士の席でお互いニコニコ笑いながらコミュニケーションしている。B (JM2→3) と O (CM3→4) が、机のコーナーをはさんで、笑いながら話している。L (CM2→3) が、1年生の基礎演習等で、日本語がよく分からないとき、E や D (JM2→3) が、親切に教えてくれたという。特に E は、数学がよく分かるので、教えてくれたという。E は人に教えるのが好きなので、将来、教える仕事、先生とかにもなりたいという。留学生の自分史の発表を聞いて、想像以上に、日本での生活、勉学、アルバイト等において、苦勞が多いことが分かる。N によると、留学生には同じアルバイトでも、きつくて汚い仕事を回してくるといふ。R によると、アルバイトの賃金等においても差別があるという。

(bX1 ; 2006年5月18日フィールドノーツより)

I (JM3→4) の自分史の発表に際して、R が、声が小さくて聞こえないとコメントした。R ははっきりした性格で、日本人ならはっきり言わないが、彼女は中国人なので、割とストレートに言う。その後、R の発表に対して、I が、声が小さいと人のことを言う前に、自分も気をつけよ、発表が長過ぎるのもっと短くせよ等々仕返しのごとくかなりきついことを言った。小さい声のぼそぼそとした言い方ではあったが、内容はかなりきつく、怒っている様子がありありと分かった。今後もこのやや陰悪な雰囲気、空気を引きずるのだろうか。R は、この4月に本ゼミに移って来たばかりであるが、やや気が強いところがみられ、しっかりしていて、本音を言う。外国語ゆえの言い方であるからだろうか。それを真に受けて、I が、かなり本気で言い返したので、正直皆びっくりした。皆下を向いて、ゼミ室の空気も一瞬、ピンと張り詰めたように思えた。今後の二人を見守っていきたい。一時的な、ごく表面上のバトルなのか、お互い根に持って、溝が深まるのか……。

(bX2 ; 2006年5月25日フィールドノーツより)

留学生 L、N、P (CF2→3) の3人が休んでいて、留学生全体の数が少なかったせいか、いつもは日本人学生、留学生が混ざって座っているのに、留学生4人 R、Q (CF2→3)、

K (CM2→3)、O がかたままって座っていた。したがって、日本人学生と留学生の交流もあまり見られなかった。(bX3 ; 2006年6月1日フィールドノーツより)

N が I にじゃれついている。N が I の手や足に触れたり、触ったりしている。I は嫌そうな顔もせず、されるがままになっている。N は、I が焼き鳥屋のバイトのし過ぎで、手に火傷を負っているのを見つけ、まじまじとその手を見て、心配そうに話しかけていた。N は、また、H (JM3→4) にも親しそうに、ニコニコして、じゃれあうように話していた。N は、言葉、日本語が、ゼミの中では一番できないが、N の人柄か、日本人ともよく、コミュニケーションをとっている様子が窺える。(bX4 ; 2006年6月8日フィールドノーツより)

今日は日本語教育の歴史に関する内容であったので、微妙な問題が多かった。いつも大人しくあまり発言しない K も珍しく意見を述べた。P、N も発言した。N は、日本語があまり堪能でないにも関わらず、今日も E と色々と話していた。聞く側の日本人も大変である。日本人はうっとうしい、煩わしいとは思っていないのだろうか。

(bX5 ; 2006年6月15日フィールドノーツより)

R と O、R と B、O と B が珍しくニコニコしながら話していた。B は、最初の頃のインタビューでは、留学生を物と言っていたのに、えらく変わったものである。

(bX6 ; 2006年6月29日フィールドノーツより)

N が E にボディータッチをして、ニコニコ笑いながら、話している。

(bX7 ; 2006年7月6日フィールドノーツより)

上記のフィールドノーツを基に分析及び考察を行う。第4セメスターの研究演習 I' では、日本人学生と留学生は、ほとんどコミュニケーションがなく、挨拶を交わす程度であったが、ほぼ半年経った研究演習 II' の第5セメスターでは、bX1、bX4、bX5、bX6、bX7 から明らかなように、日本人学生と留学生は、多少個人差はあるものの、お互いニコニコとして話をし、コミュニケーションするまでに表情や行動等が変化し、変容していることが分かる。中には、一部の者ではあるが、bX4、bX7 から分かるように、ボディータッチまで見られる。反対に、bX2 からは、日本人男子学生と女子留学生のバトルが見られる。当初 I は少し大人気無いのではと思われたが、これもお互い少し打ち解けてきて、本音が言えるようになったと解釈すべきであろうか。異文化接触、異文化理解の観点からすれば、日本人学生は、留学生はストレートに本音を言うという、中国人のものの言い方、異文化を知ることができたのではないだろうか。これまで日本人同士ではほとんど見られなかったことを知り得たと言える。留学生も、日本人は何も言わないと思っていたら、このようにはっきり言う人もいることが分かったのではないだろうか。日本人と中国人、男性と女性、先輩と後輩であっても、臆することなくお互い言いたいことは言う場合もあることが確認された。bX3 から、やはりまだ、本質的には留学生は留学生同士で固まり、日本人学生と留学生は真に打ち解け、理解し合っているとは言い難いのではないかと思われる。

ゼミのリーダー格の H が司会をして、2005 年 9 月のゼミの開始から、この約 1 年間で、どのように日本人学生、留学生がお互い変容したかについて、ディスカッションをした。

最初日本人学生が留学生に抱いていたイメージは、話しかけにくい、勉強熱心、真面目、中国人同士でいる等々であった。一方、留学生が日本人学生に抱いていたイメージは、ニート、金持ち、幸せ、ギャンブル好き、勉強嫌い、遊び好き、伝統を重んじる等々であった。しかし、ほぼ 1 年経った今では、日本人学生から見た留学生は、実際話してみれば話しやすい、よくしゃべる、苦労している、積極的等々である。一方、留学生から見た日本人学生は、親しみやすい、伝統的ではない、真面目等々である。

(bX8 ; 2006 年 7 月 13 日フィールドノーツ、デジタルビデオカメラの録画資料、IC レコーダー資料より)

bX8 から、明らかなように、初め日本人学生は留学生に対して、話しかけにくいというイメージを抱いていたが、この 1 年で、留学生はよくしゃべる、話しやすい等の認識が得られ、留学生へのイメージ及び意識が変容している。一方、留学生は日本人学生に対して、初めは伝統を重んじると考えていたが、1 年間の異文化接触、異文化理解によって、実際は、日本人学生は伝統的ではないことが分かり、日本人学生への認識が変容している。

ゼミ生の交流をより深めるべく、また、今期の締めくくりとして、7 月 13 日、夜コンパを行った。コンパを行うと普段ゼミでは見られない日本人学生、留学生のお互いの顔が見られ、より仲良くなり、理解が深まったように思える。

この段階においては、三宅¹¹⁾ (2006) の言う半知り、すなわち、親しくはないが、知らないわけではない人間関係の相手、例えば、クラスメイト等の状態は脱出し、かなり親しく、お互いコミュニケーションできる状態になったと言える。

3. 研究演習Ⅱ' 後期 (第 6 セメスター) における変容

約 2 か月の夏休みを経て、9 月からは研究演習Ⅱ' の後半となった。

日本人学生に、外国語としての日本語をより理解してもらうため、国際交流基金による外国人のための「日本語能力試験」1 級の読解・文法の問題 (200 点、90 分) を実施した。

(cX1 ; 2006 年 10 月 12 日フィールドノーツより)

N と H がうるさいぐらいよくしゃべりコミュニケーションをしている。途中、じゃれあってもいた。

(cX2 ; 2006 年 10 月 19 日フィールドノーツより)

N が I にニコニコしながらニックネームを言って絡んでいた。I もニコニコして、絡まれてるんですと言っていた。

(cX3 ; 2006 年 12 月 7 日フィールドノーツより)

R と B が、お互い机の角同士、すなわち R がパソコンを背に、B が窓を背に座って、話している。N が、先週欠席していた H に対して、顔を見るや否や「久し振り」と言って、声

をかけていた。(cX4 ; 2006年12月14日フィールドノーツより)

今日も、先週と同様、RとBが、お互い机の角同士に座って、話している。

(cX5 ; 2006年12月21日フィールドノーツより)

ゼミ生同士の親睦及び交流をより深め、異文化接触及び異食文化理解をより得るため、12月24日、Xmas Cooking Party を開催した。

研究演習Ⅱ’の最後に、まとめとして、ゼミに対するそれぞれの意見や考えを書いてもらった。それを記述資料とした。文体はそれぞれ学生が記述したままとする。／は、段落変えを示す。

～～(略)～～、このゼミに入ったからこそ得られたものもありました。例えば、授業中に留学生の意見を聞くというような授業は、この授業以外にはありませんでした。この授業では留学生の意見が聞けたのでそれは非常に良かったと思いました。大学内でゼミの留学生とすれ違おうと挨拶をしたりと、このゼミを受けていなければしていなかっただろうことができたのは良い経験になったと思います。(A)

～～(略)～～、受けている中で、外国語としての日本語を初めて体験したわけですが、やはり私達が今まで勉強してきた形式とは違っており、留学生の立場になって考えることができました。／お隣に座っているGさんとDさんと仲良くなったような気がします。時々、歩いている時に、見かけると話すようになりました。／Rさんと仲良くなった。見かけると話をするようになった。また、ゼミの時など、暇な時に気軽に話をした。また、お菓子の交換をよくして、おいしかった。また、テスト前に資料をもらい、大変助かった。(B)

留学生の方とは学内などで会うと挨拶をする程度で、一緒に学んだりお互いを高めあったりという場面というのは見られなかった気がします。日本人の人とは、ゼミで初めて知り合ってから、一緒に授業を受けたり就職のことを相談したり、仲良くできた人もいました。(D)

初めの頃よりは、留学生との交流が深まったと思うけれど、まだまだだと思う。でも留学生と挨拶するようになった。自分が普段一緒に授業を受けている日本人の人たちと比べると交流は少ないと思う。留学生も僕たち日本人と仲良くしたいと思っているし、自分たちも交流を持ちたいと考えていることは理解できたと思う。ゼミの日本人同士は授業も一緒に受けるし、話もするけど、留学生と一緒に授業を受けることは少ない。学部が違うので仕方がないけど、一緒に受けたいし仲良くしたいと思う。ゼミで同じ教室にいれば、話もするし交流も深まるけど、自分と合う人、合わない人がいるので、仲良くなる人は、限られていたけど、話す人とは良く話したし、仲良くなったと思う。日本人、留学生が仲が悪いとは思わない。どんなことを考えているのかまでは、はっきり理解はできていないけど、どんな性格の人かどんなタイプかは分かった。それぞれ仲の良い人がいるし、それぞれ交流があるので、上手くいっていると思う。(E)

～～(略)～～、留学生を留学生だと特別視することはなくなった。日本語について知った

ことを人に話をするようになった。隣に座る人とは、とても仲良くなると思う。(G)

～～(略)～～、日本の学生の生活とか趣味とか色々知りました。ある人は自転車に興味深い。多くの日本人学生は野球をした経験がある。日中の歴史について、理解できるかどうか分からないが、現代中国人について少し説明した。／～～(略)～～、日本文化と中国文化、日本人と中国人などの交流をした。現代日本の若い人を理解できた。(K)

1年間あったので、日本の学生と一緒にたくさんの知識を勉強した。初めより交流は深くなった。授業でみんな楽しい雰囲気発言できる。(N)

12月24日のXmasパーティーに出席して、大変楽しかった。日本人の学生は今年大変変わったと思う。前より明るくなった。来年、頑張って、皆さんとよく交流できるようにしたい。(Q)

今年の4月にこのゼミに入らせていただきました。最初に入った時に、みんなとの交流ができなかった。外で会っても話もしなかった。1年経って、ゼミの皆さんとよくしゃべるようになった。よく同じ席に座って、隣のBさんとよくしゃべりました。また、日本人の性格なども分かりました。また、ゼミの飲み会でみんなとよく交流できたと思います。～～(略)～～、いつもBさんから食べ物をもらいました。(R)

(cZ1 ; 2007年1月11日記述資料より)

最後に、上記のフィールドノーツ及び記述資料を中心として、これまでのフィールドノーツ及びインタビュー等も合わせて、総合的に分析及び考察を行う。研究演習Ⅱ'の前期の第5 SemesterのbX1、bX4、bX5、bX7及び後期の第6 SemesterのcX2、cX3、cX4から明らかのように、Nは、日本語が十分でないにも関わらず、E、H、I等、席が近くになった者には、誰ともコミュニケーションをよくとっていることが分かる。異文化におけるコミュニケーション、異文化接触、異文化理解は、単に語学力だけではなく、その人物のパーソナリティに大きく関わっていると云える。cX4、cX5、cZ1B、G、Rから、明らかのように、座る席が隣になり、コミュニケーションすることによって、異文化接触の機会が増え、その結果異文化理解が深まり、仲良くなっていることより、座る席の遠近によって、変容の度合いも異なると云える。

Bは、研究演習Ⅰ'のインタビューaY2では、留学生のことを、言葉が通じないから、人というより、物という見方をしていたと述べているが、半年後の研究演習Ⅱ'の前期のフィールドノーツbX6によると、RやOとニコニコしながら話している。更に半年後の研究演習Ⅱ'の後期のフィールドノーツcX4、cX5によると、Rとお互い机の角同士に座って話している。また、記述資料cZ1Bには、Rさんと仲良くなったとある。見かけると話をするようになり、ゼミの時など、暇な時に気軽に話をしたとある。また、お菓子の交換をよくして、おいしかったとある。更に、テスト前に資料をもらい、大変助かったとある。これらから明らかのように、半年毎に、段階を追って、留学生に対するBの心情、表情、考え方、行動、態度、言動、意識等々が大きく変

容していることが分かる。日本人学生と留学生の間において、お菓子の交換やテスト資料の授受が行われるまでに至っていたこと等、教師として全く知り得なかったことが、記述資料によって明らかにされた。

cX1、cZ1B から、外国語としての日本語を初めて体験することによって、留学生の立場になって考えることができたとあり、自文化の視点からだけではなく、異文化の視点からも捉えることができていることが分かる。cZ1A から、授業中に留学生の意見を聞くということは、他の授業においては、取り立ててなされていない場合もあることが示唆された。日本人学生は、留学生の意見が聞けることを肯定的に捉えていると言える。cZ1D、E から、この段階においても、日本人学生と留学生の交流は、日本人学生同士の交流より少ないことは明らかであるが、日本人学生が、留学生と交流を持ちたいと考えていることは理解できていると考えていることが分かる。cZ1E、K、Q、R から、日本人学生も留学生も、お互いにどんな性格か、どんなタイプの人間か、明るくなった、現代日本の若い人等、異文化接触において、性格、人格、人物を重要視し、それが理解できたことが、変容における大きな位置を占めていると言える。

V. おわりに

第IV章では、第4セメスター、第5セメスター、第6セメスターと3段階にわたって、それぞれフィールドノート、インタビュー、記述資料等による各調査結果を基に、分析し考察することによって、日本人学生及び留学生の異文化接触、異文化理解による変容の具体的内容及び段階や過程が明らかになった。真嶋¹²⁾(2006)によると、教育の醍醐味は、相手及び自分の内面に変化を起こさせることであり、自文化(母文化)と異文化を知り、理解することによって、個人の内面の変容が期待できることである。具体的には、視野の拡大、不確かなものへの寛容度、違いを善悪・優劣で捉えない文化相対主義的な見方ができるようになること、そして異なった考え方・価値観・生活様式などを理解することにより、自分の生活を豊かにすることができることなどであるという。日本語教育はこのような点において、常に異文化接触の場であり、異文化理解がなされ、異文化コミュニケーションそのものであると言える。

本研究では、研究演習のクラスに日本人学生と中国人留学生しか存在しなかったが、ここに韓国人留学生が存在したらどう変化するのか、中国人留学生と韓国人留学生との関係はどうか、日本人学生の中国人留学生に対する関係と日本人学生の韓国人留学生に対する関係はどう違うか等を今後の課題としたい。また、筆者の研究演習における留学生だけではなく、大学全体として、U大学の新生留学生が、大学4年間でどのように日本人学生と異文化接触、異文化理解をし、日本語力及び日本文化を身につけて成長していくのかを、日本人学生の変容と合わせて探っていきたい。また、留学生のU大学外の日本人との異文化接触について、研究演習内及び研究演習外の学内での変容とそれぞれ比較することによって、より研究を深めていきたい。そして、浅野¹³⁾(1999)

に見られるように、留学生の生活全般における文化変容についても今後の課題としたい。更に、浅井¹⁴⁾ (2002) に見られるように、限られた人物を追って、より深く探究していく方法も今後の課題としたい。

引用文献、注

- 1) 山田泉：『異文化適応教育と日本語教育 2 社会派日本語教育のすすめ』（凡人社，1996）。
- 2) 山田泉：「異文化間コミュニケーションと日本語教師」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』（世界思想社，2001）第Ⅲ部第2章。
- 3) 福岡寿美子：「第二言語教育における質的研究について—日本語教育における質的研究方法を探る—」『日本語教育論集』第12号（2003）195-202。
- 4) 福岡寿美子：「日本語教育における質的研究の可能性—エスノグラフィーを中心に—」『日本語教育論集』第13号（2004）211-218。
- 5) N・K・デンジン／Y・S・リンカン編（平山満義・岡野一郎・古賀正義訳）：『質的研究ハンドブック 1 巻—質的研究のパラダイムと眺望—』（北大路書房，2006a）。
- 6) N・K・デンジン／Y・S・リンカン編（平山満義・藤原顕訳）：『質的研究ハンドブック 2 巻—質的研究の設計と戦略—』（北大路書房，2006b）。
- 7) N・K・デンジン／Y・S・リンカン編（平山満義・大谷尚・伊藤勇訳）：『質的研究ハンドブック 3 巻—質的研究資料の収集と解釈—』（北大路書房，2006c）。
- 8) カール・A. グラント／グロリア・ラドソン・ピリング編（中島智子・太田晴雄・倉石一郎訳）：『多文化教育事典』（明石書店，2002）。
- 9) 金本伊津子：「異文化の歩き方・学び方・描き方—フィールドワーカー—」石井敏・久米昭元編『異文化コミュニケーション研究法—テーマの着想から論文の書き方まで—』（有斐閣ブックス，2005）第1章。
- 10) 佐藤郁哉：『ワードマップフィールドワーク増訂版—書を持って街へ出よう—』（新曜社，2006）。
- 11) 三宅和子：「『ことばの教育』は何をめざすのか—アカデミック・ジャパニーズの地平から見えてきたもの—」門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』（ひつじ書房，2006）189-204。
- 12) 真嶋潤子：「日本語教育から見た異文化理解」細谷昌志編『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』（世界思想社，2006）85-103。
- 13) 浅野慎一：『日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容—』（大学教育出版，1999）。
- 14) 浅井亜紀子：「文化移動に伴うインド人留学生の自己再構築—身体化した自己と受容認知の視点から—」異文化コミュニケーション学会編『異文化コミュニケーション』（異文化コミュニケーション SIETAR JAPAN，2002）№5 1-17。

参考文献

- 1) 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編：『教育研究のメソドロジー』（東京大学出版会，2005）.
- 2) R・エマーソン／R・フレッツ／L・ショウ（佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳）：『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで—』（新曜社，2003）.
- 3) 石井敏・久米昭元・遠山淳編：『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて—』（有斐閣ブックス，2003）.
- 4) 石黒広昭編：『AV 機器をもってフィールドへ—保育・教育・社会的実践の理解と研究のために—』（新曜社，2001）.
- 5) 石黒広昭編：『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィー—』（北大路書房，2004）.
- 6) 異文化間教育学会紀要編集委員会編：『異文化間教育』16（アカデミア出版会，2002）.
- 7) 植田晃次・山下仁編：『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ—』（三元社，2006）.
- 8) 上野直樹・ソーヤリエコ編：『文化と状況の学習—実践、言語、人工物へのアクセスのデザイナー—』（凡人社，2006）.
- 9) ウヴェ・フリック（小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳）：『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論—』（春秋社，2003）.
- 10) S・B・メリアム（堀薫夫・久保真人・成島美弥訳）：『叢書・現代社会のフロンティア③質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー—』（ミネルヴァ書房，2005）.
- 11) 岡崎洋三・西口光一・山田泉編：『日本語教師のための知識本シリーズ③人間主義の日本語教育』（凡人社，2003）.
- 12) 梶田正巳：『学びの教育文化誌』（ナカニシヤ出版，2004）.
- 13) 鎌田修：「外国語教育の求めるもの—日本語教育から見た多文化理解とその実践—」奥川義尚・堀川徹・田所清克編『異文化を知るこころ—国際化と多文化理解の視座から—』（世界思想社，2003）V - 2.
- 14) 倉八順子：「多文化間コミュニケーションを可能にするもの」渡戸一郎・川村千鶴子編『多文化教育を拓く—マルチカルチュラルな日本の現実のなかで—』（明石書店，2002）第7章.
- 15) クレイグ・ショードロン（田中春美・吉岡薫訳）：『ケンブリッジ応用言語学シリーズ第2言語クラスルーム研究』（リーベル出版，2006）.
- 16) 古賀正義：『〈教えること〉のエスノグラフィー—「教育困難校」の構築過程—』（金子書房，2001）.
- 17) 古賀正義編：『学校のエスノグラフィー—事例研究から見た高校教育の内側—』（嵯峨野書院，2004）.
- 18) 国立国語研究所編：『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』（アルク，2006）.
- 19) 佐藤郁哉：『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる—』（新曜社，2004）.
- 20) 志水宏吉編：『教育のエスノグラフィー—学校現場のいま—』（嵯峨野書院，2002）.
- 21) J. V. ネウストブニー・宮崎里司編：『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために—』（くろしお出版，2002）.
- 22) ジョン・ヴァン・マーネン（森川渉訳）：『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法—』（現代書館，2001）.
- 23) 鈴木淳子：『調査的面接の技法』（ナカニシヤ出版，2005）.

- 24) 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編：『人間科学研究法ハンドブック』（ナカニシヤ出版，2006）.
- 25) 段躍中：『現代中国人の日本留学』（明石書店，2003）.
- 26) 徳井厚子・榎本智子：『対人関係構築のためのコミュニケーション入門—日本語教師のために—』（ひつじ書房，2006）.
- 27) 同志社大学教育文化学研究室編：『教育文化学への挑戦—多文化交流からみた学校教育と生涯学習—』（明石書店，2006）.
- 28) 縫部義憲編：『多文化共生時代の日本語教育—日本語の効果的な教え方・学び方—』（瀝々社，2002）.
- 29) 春原憲一郎・横溝紳一郎編：『日本語教師のための知識本シリーズ⑤日本語教師の成長と自己研修—新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして—』（凡人社，2006）.
- 30) 飛田良文編：『日本語教育学シリーズ第1巻異文化接触論』（おうふう，2001）.
- 31) 平山満義編：『質的研究法による授業研究—教育学・教育工学・心理学からのアプローチ—』（北大路書房，1997）.
- 32) B・G・グレイザー／A・L・ストラウス（後藤隆・大出春江・水野節夫訳）：『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか—』（新曜社，2002）.
- 33) ヘレン・スペンサー・オーティエ編（田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳）：『異文化理解の語用論—理論と実践—』（研究社，2004）.
- 34) 箕浦康子編：『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』（ミネルヴァ書房，2002）.
- 35) 宮内洋：『体験と経験のフィールドワーク』（北大路書房，2005）.
- 36) 宮崎里司／ヘレン・マリOTT編：『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』（明治書院，2003）.
- 37) 宮島喬・加納弘勝編：『国際社会2変容する日本社会と文化』（東京大学出版会，2002）.
- 38) 横田雅弘・白土悟：『留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか—』（ナカニシヤ出版，2004）.
- 39) 横溝紳一郎：『日本語教師のためのアクション・リサーチ』（凡人社，2000）.
- 40) 渡辺文夫：『セレクション社会心理学 22 異文化と関わる心理学—グローバリゼーションの時代を生きるために—』（サイエンス社，2002）.